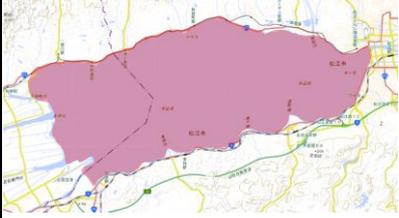


生物・生態サイトカード

通しNo.	B-3	更新日	2025/3/19
サイト名	^{しんじこ} 宍道湖とヤマトシジミ		
基本情報	区分	<input checked="" type="checkbox"/> 動物 <input type="checkbox"/> 植物	
	生息地	島根県松江市、出雲市(宍道湖)	
	分類		
	管理団体／ 保護団体／ モニタリング	宍道湖漁業協同組合	
	留意点		
サイトの解説	生物・生態	<p>宍道湖の湖底に生息する貝類など、魚類のように速やかに移動できない定着性の生物種は、中海などに比べるとはるかに少ない。これは、低塩分の弱汽水域にうまく適応した生物種の分化が進んでいないためと考えられる。一方、弱汽水域にうまく適応した生物種は、競争相手が少ないため猛烈な繁殖をすることができる。その代表がヤマトシジミであり、シジミの漁獲高で全国のトップクラスを維持し続けている。</p> <p>ヤマトシジミの成貝は塩分耐性がかかなり広く、淡水でも生育することができるが、稚貝の耐性はかなり狭く、中海のような汽水域の塩分濃度や淡水では再生産することができない。ヤマトシジミの産卵に最も適した塩分濃度は、海水の約6分の1程度といわれており、宍道湖のような弱淡水域が最適な繁殖環境となっている。このように、ヤマトシジミは、宍道湖の環境にぴったり合った特異な生物といえ、競争相手のほとんどない宍道湖において、爆発的に生息域を広げることができたわけである。</p> <p>宍道湖は、わが国で7番目に広い湖であるが、漁獲量は霞ヶ浦や琵琶湖を大きく引き離し全国一を誇っている。このほとんどがヤマトシジミによるもので、シジミの漁獲高は全国の4割以上と全国一を誇っている。</p> <p>一方、宍道湖におけるヤマトシジミの生息域は、沿岸部の4mほどまでの浅い水域に限られている。昭和10年代には湖心部にもヤマトシジミが生息していたが、夏場に湖心部の湖底が無酸素状態になるため、現在では生息していない。日本一のシジミ産地を守っていくためにも、県民が一体となった宍道湖の浄化対策が望まれる。</p>	
	地形・地質、 歴史・文化等	<p>宍道湖は湖岸100m沖まで水深2～3mの湖棚が広がっており、さらに沖では水深4～5mの緩やかな湖盆となっている。湖棚は砂が堆積しており、シジミにとって好適な底質環境になっているが、ヘドロ堆積物で占められている湖盆では塩分の高い水が停滞しやすいため、硫化水素を発生するなど、近年シジミの生息に悪影響をもたらすこともある。</p>	
写真・図等	 <p style="text-align: center;">宍道湖のシジミ漁風景</p>		
参考文献	<p>佐藤仁志(2015) 松江市史 通史編1自然環境・原始・古代(松江市史編集委員会): 128-129. 松江市. 佐藤仁志編(1985) 宍道湖の自然. 山陰中央新報社.</p>		